

課題

- 読書バリアフリー法の公布・施行**
読みに困難のある人々に、アクセシブルな電子書籍等が提供されることが基本理念
- 通常の小中学校には、読み書きに著しい困難を示す児童生徒:3.5%**
→合理的配慮を提供する必要がある。
- マルチメディアDAISY図書**
→**アクセシブルな電子書籍等の一つ**
読書バリアフリー法の理念に則り、読みに困難のある児童生徒に対して、地域図書館や学校図書館がマルチメディアDAISY図書を提供することが必要

事業のねらい

目的1

地域の図書館において、①図書館員等への研修の実施、②図書館における「音声教材啓発コーナー」の設置による地域への音声教材の啓発に取組み、地域の図書館員及び地域住民へ音声教材を普及させること

目的2

小中学校の学校図書館において、学校司書が学校に在籍している読みに困難のある児童生徒に対してマルチメディアDAISY図書を製作・提供するモデルを構築すること

主な実施内容

1. 大阪市立中央図書館の図書館員等や小中学校学校司書等への研修
テーマ：読みに困難のある子どもに対する支援と図書館の役割－その背景と音声教材について－
2. 小中学校の学校司書に対する音声教材の製作支援

1. 図書館員等や学校司書への研修の実施



読みに困難のある子どもに関わる関連法律とともに、知的障害、外国籍の子どもに対する音声教材を用いた支援事例を紹介。

2-1. 小学校の学校司書に対する製作支援



図書室のポスターにQRコード
⇒GIGA端末で読み取り

小学校3校の学校司書に対して、マルチメディアDAISY等の音声図書の製作支援を実施。さらに、読みに困難のある児童が活用しやすい図書館になるよう指導助言（左写真）。

2-2. 中学校の学校司書及び生徒に対する製作支援



学校司書1名と中学校生徒18名が児童書「おしりたんてい」(ポプラ社)のマルチメディアDAISY化に取組んだ。生徒はテキスト入力グループ、画像編集グループ、音声入力グループに分かれ、それぞれ製作支援した。

成果

1. 図書館員等への研修の実施

計106名の参加があった。研修後にアンケートを実施し、分析した（5件法）。令和3年度から継続して研修を受講した図書館員等の平均点の上昇が見られた。よって、研修の継続は読みに困難のある子どもの支援に関係する法律、支援方法等の理解の深まりにつながったと言える。

2-1. 小学校に対する製作支援の成果

学校司書が「みえるとかみえないとか」(アリス館)、「字のないはがき」(小学館)「ひらがなにっき」(解放出版社)などをマルチメディアDAISY化した。製作支援を繰り返すことで、学校司書一人で製作できるようになった。

2-2. 中学校に対する製作支援の成果



中学校生徒が製作した「おしりたんてい」(ポプラ社)を小学校4年生の図書の時間でお披露目した。

図書の時間終了後に参加した児童65名にアンケートを実施したところ、全て肯定的な意見であった。

まとめ

- 継続して研修を行うことで、読みに困難のある子どもの支援等の理解につながった。
- 製作したマルチメディアDAISY図書を今後図書室で読めるような体制整備の実施。

課題

- 各図書館での環境整備に向けて、より具体的な取り組みを行えるよう、好事例を示し、理解を広げる
- 図書館関係者同士の活発な交流の場が、コロナ禍によって減少

事業のねらい

各図書館での環境整備に向けて、より具体的な取り組みが行なえるよう、以下の点に特化し、参加者の意識の向上を図る⇒**具体的取組みに繋げる**

- ・各図書館における施設面とサービス面の好事例を講義によって示し、現状と課題を認識するとともに、課題の解決について考える
- ・グループワークにより参加者同士の情報交換を行い、多角的な視点を得る



※会場の一隅には、アクセシブルな書籍やマルチメディアDAISYを展示。参加者らには、自由に手に取って閲覧いただいた

実施内容

- ①読書バリアフリー概論
- ②WS「図書館のソフト面のバリアフリーについて」
- ③WS「図書館のハード面のバリアフリーについて」
質疑応答・まとめ

※事前に当機構の読書バリアフリー関連動画の視聴と、自館の課題点の調査レポート提出を課した



有限会社
読書工房
代表 成松一郎様
(総司会及び
コーディネーター)

- ①読書バリアフリー概論 文部科学省 総合教育政策局
地域学習推進課 図書館・
学校図書館振興室 専門官 工藤松太郎 様



読書バリアフリー法の基本計画の概要をご説明いただき、本法律の要点、指針をお伝えいただいた。

- ②「図書館のソフト面のバリアフリーについて」
一般社団法人スローコミュニケーション
副理事長 羽山慎亮 様



あらゆる人にわかりやすい言葉遣い・コミュニケーションの要点を、「利用案内づくり」を通して学ぶWSを実施。

- ②「図書館のハード面のバリアフリーについて」
鹿島建設株式会社 一級建築
博士(人間科学) 原 利明 様



※所属先の規程により、外出制限があり、オンライン出演

視覚障害当事者の立場から、使いやすい施設の工夫点など、好事例を紹介。各班で図書館施設の課題等を考えるWSを実施。

成果

- 好事例を示し、課題や目標を明確化するとともに、理解を促進した

特に、ソフト面のバリアフリーワークショップでは、各館でもすぐに取り入れられる「分かりやすい利用案内」を作成するための具体的なノウハウを伝えた。



「利用案内情報」を分かりやすい表現に書き換えるワークショップ。各班で話し合い、分かりやすさを検討した。

- 参加者同士の活発な意見交換が果たせた

担当・地域の異なる参加者同士が、各視点を踏まえたグループワークを行うことにより、図書館全体や自館の課題の認識に繋がった。また、意欲向上も図ることができた。



ワークショップ「図書館内のバリアフリー的な課題と解決案」を書き記した模造紙。各班での活発に議論された。

※成果については、「参加者アンケート」(別添資料)に基づきまとめた